

共通
Q&A

歴代編集者6名に「Q1. 思い入れのある、またはお気に入りの記事」「Q2. 編集担当をしていた中で、もっともピンチだと思った瞬間」「Q3. 今後の博物館における刊行物の役割や意義とは？」の3問をお聞きました。

やました ひろゆき

山下 浩之(学芸員)

編集担当
期間通巻 1号(1995年6月発行)～ 5号(1996年5月発行)
通巻61号(2010年6月発行)～72号(2013年3月発行)

地学分野、岩石担当の学芸員の山下浩之です。メガマリオンと呼ばれる特異な海底地形から採集した岩石、特に斑れい岩類の成因を研究しています。これとは別に、人文系の学芸員と連携して、石材の研究や普及事業も行っています。

A1. 思い入れのある記事の紹介の前に、実は私は本誌の第1号の編集担当だったのです。25年前、手探り状態で自然科学のとりらのレイアウトを行ったのを懐かしく思います。しかし、今回はあえて別の記事を紹介させていただきます。お気に入りの記事は、通巻70号(2012年9月)の川島逸郎さんの記事です。川島逸郎さんは生物画家で、当時非常勤学芸員として勤務されておりました。自然科学のとりらは、表紙の写真が美しいことが特徴の一つであると思いますが、本号では、川島さんが描かれた蛾の繭の標本画が表紙を飾りました(標本画の詳細は通巻63号参照)。

しかし、編集担当として表紙を作成する場合、写真ならば色の調整もなんとなくわかるのですが、カラーの標本画となると色の調整がよくわかりません。また、この時は4つの標本画が別々に送られてきたのですが、これらを1つの枠の中に収めて調整するのも苦労しました。苦労しましたが、お気に入りとなりました。

A2. ピンチを感じたのも同じ巻号の川島さんの記事です。自然科学のとりらの原稿の文字数は決まっており、通常学芸員は文字を多めに書いてくることが多く、編集、校正の段階で文字を減らしたり写真を縮小したりして調整します。通巻70号では、表紙と同時に中びらきのカラー原稿も川島さんでした。しかし、送られてきた原稿を編集すると、写真が多いわりに文字数が極めて少なく、あぜんとしました。もはや編集ではどうにもならない?と思いました。紹介すべき6種類のハチを、それ

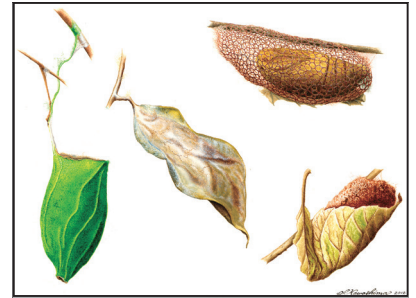


図. 通巻70号で表紙を飾った川島逸郎さんの「繭」の標本画。

ぞれ枠で囲って図鑑形式でまとめていくことで何とかしのぎました。

A3. 自然科学のとりらは、デジタル版になったおかげですべてのページがカラーになりました。文字が多くて丁寧な解説は魅力的ですが、カラー写真を多く取り入れたビジュアルなページをもっと増やせればと思います。このような紙面を通して、自然科学の魅力を皆様にお伝えできればと思います。

さとう たけひろ

佐藤 武宏(学芸員)

編集担当
期間

通巻6号(1996年8月発行)～16号(1999年3月発行)

無脊椎動物を担当しています。カニ、貝やイカ、ウニやヒトデなどの資料を管理し、イソギンチャクやクラゲなどの質問にも対応することもあります。博物館に入るまでは館員が印刷物の編集やレイアウトをしているとは知りませんでした。が、やってみれば意外に性に合っていたのか15年以上にわたって毎年何かしらの印刷物の作成を担当しました。今は広報や普及と学校連携を受け持つ課の取りまとめをしています。

A1. 新採用として着任した出川洋介学芸員(現・筑波大学准教授)に、自己紹介を兼ねて自分の研究内容を紹介する記事を、通巻14号(1998年9月)に書いてくれるようお願いをしました。すると彼は二つ返事で快諾し「不思議なカビの恋愛事情について書きますよ!」と言うのです。「不思議」と「カビ」と「恋愛事情」という単語の繋がりがまったく予想外

だったので驚愕しました。しかし受け取った原稿を読むと、この「不思議なカビの恋愛事情」こそ彼の研究を一言で言い表した秀逸な表現だったことに驚嘆しました。今までいろいろな科学エッセイを読む機会がありましたが、これ以上にインパクトがあり、読者を捕らえ、記事の内容を端的に表現し、その背景である研究世界を示唆するタイトルは今でもそう見当たらないと感服しています。

A2. 「参ったなあ」と思ったのは、通巻12号(1998年3月)に掲載された『ラブカ』の記事に関するものです。有名ながら謎多き深海魚ラブカを、迫力ある写真を用いて瀬能宏学芸員が解説した出色の記事でした。今こそラブカの画像はネット上でも沢山見ることができますが、当時一般向けに鮮明な写真で紹介した記事はほとんどなかったように思います。事件は掲載直後。「オレはサメが嫌い

なんだ。イヤなものを掲載するな。おかげでメシが不味くなった」というクレーム(言いがかり?)の電話を頂戴したのです。ラブカも瀬能学芸員も濡れ衣です。電話口で謝りながら「飯時に読まなきゃいいじゃんかよ……」と心の中でぼやいた覚えがあります。

A3. 子どもたちが博物館と関わるきっかけは展示でしょう。そして、広報誌や友の会、ボランティア、学芸員への質問などを通じてその関係はだんだん深まっています。そこで、執筆や編集の時にはいつも「自然科学に興味のある、ちょっと背伸びをした中学生が読めるような」という、この広報誌のコンセプトを強く意識しています。紙がデジタルに変わっても、そしてこの先も自然科学のとりらが次世代を担う若者たちにとって「自然科学」の世界に飛び込む「とりら」であってほしいと願っています。